

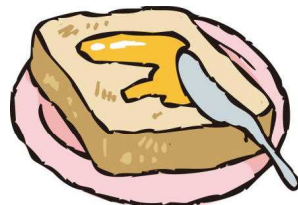
いい性格なんである。他人を気遣い、ほがらかで、意見はあるが頑固でなく、譲るときはちゃんと譲る。

伊藤比呂美『ウマシ』

熊本で、老いた父と呑み込む生卵。カリフォルニアで、娘とつづくパンケーキ。東京で、やっと出会えたあの鰻重。更年期、遠距離介護、夫の看取り。女の人生も後半戦。満身創痍で駆け抜けながら、詩人が「ウマシ」と叫んだものは一。詩人として、娘として、母として、太平洋を股にかけ、東奔西走するおばさんのエネルギッシュな食エッセイ。（「BOOK」データベースより転載）

先日、2年次探究活動として行われた異文化交流体験、題してSGG（Sanjo Global Gateway）に僕も飛び入りで参加した。本校に来ていただいた外国の方に和食を作ってもてなしたグループがあって、いろんな食べ物を楽しんでもらった。豚丼にうどん、トンカツなんかもあった。ガイドブックに載っているような名物料理ではなく、その国の家庭料理を食べるとその国のことがよくわかるような気がする。

随分前のことになるが、海外語学研修の生徒引率でイギリスに3週間ホームステイしたことがある。朝食は、ミルクティーにイギリス式のカリカリトーストにマーマレードを塗って食べる。うまい。イギリスの食事はまずいというのが定説のようだけれど、ホストファミリーの食事はおいしかった。食事のたびにホストファーザーが「lovely！」と奥様に笑顔で言うのが素敵だった。そう、彼にとっては like ではなく love なんだ。僕のお気に入りにはパスタのミートソースだった。ゆでたてのパスタにピザ用のシュレッドチーズをたっぷりのせて、その上に熱々のミートソースをのつける。溶けたチーズがパスタと絡み合って最高！これには僕も「lovely！」と叫んだ。



ホームステイも終盤にさしかかったとき、ホストファーザーが「米が恋しくなってきたのではないかな」と言って町のレストランに連れて行ってくれた。聞けばおいしいライスプディングが食べられるのだという。生まれて初めて食べたが、甘い味付けと米がどうしても僕の中でしっくりこない。国によってお米の扱いが全く違うということは頭ではわかっていたのだけれど、この時ばかりはやっぱお米はご飯にして食べるのが一番だと思った。それまでホストマザーが持たせてくれるお昼のサンドイッチに何の不満もなかったのに、急におにぎりが恋しくなってしまったのには困った。

伊藤比呂美さんは詩人。熊本と米国・カリフォルニアを拠点とし、往復しながら活動している。そんな彼女の食べものに関するエッセイが『ウマシ』。単純においしかったものの紹介ではなく、独特の文明批評にもなっているところが面白い。

日本ってところはすごい。葉菜も根菜も豆も雑穀も海藻も、しゃきしゃき、ねっとり、ずるずる、もちもち、ほくほく、しみしみ、ごりごり、いろんなふうに調理されて実にウマイ。人と野菜がまったりとむつみ合っておる。

対して、アメリカのベジタリアン食には

なんか野菜が好きで食べたくて食べるというより、罰するために野菜を食べているような、ストイックなマゾヒズムさえ感じてしまうのだ。

なんて指摘したりする。詩人だけあってリズムのよい文章がとても心地よい。

さて、問題は今日の名言である。こんな人に僕もなりたいたいと思うが、どっこい、これは人ではない、食べ物についての文章なのだ。何のことかわかるかな？

人の手を感じる。人の体温を感じる。人の心を感じる。

お釜の湯気を感じる、お米の性格を感じる。

いい性格なんである。他人を気遣い、ほがらかで、意見はあるが頑固でなく、譲るときはちゃんと譲る。

答えは、「おにぎり」でした。確かに作ってくれる人のあたたかさを感じる食べ物だよ。日本にはそんな料理が多いと思う。今回のSGGでも一番美味しい状態で食べてもらおうとみんな走り回っていた。それこそご馳走だ。君たちが作ってくれたひとつひとつの料理が日本人の心をしっかり伝えてくれたと僕は思うよ。